

令和 6 年度 東京藝術大学 未来創造継承センター 芸術資源活用プロジェクト 実績報告書

※Word ファイルで提出してください。

プロジェクトの タイトル	Le Rire 展 ～風刺画を紐解く～	
実施責任者 (申請代表者)	氏名	所属／学年／役職 (所属がない方は未記入)
	渡辺 愛	音楽環境創造科非常勤講師
実施期間	2025年3月27日 ～2025年3月31日	
実施内容 ※申請書の「プロジェクトの概要」や「実施計画・方法」に記載した内容について、実際にどのようなことを実施したのかについて記載。 (500～600 字)	本企画「Le Rire 展 ～風刺画を紐解く～」は 1894 年にパリで創刊したカラー風刺雑誌「Le Rire (ル・リール)」の展示である。東京藝術大学附属図書館に 2015 年より収蔵された 1615 冊もの Le Rire は、その数の多さと保存状態により約 9 年間ほとんど利活用されてこなかったが、2024 年 1 月に旧蔵者で洋画家である渡辺恂三のコレクション展「Le Rire 表紙展～渡辺恂三の集めた夢～」として初めて 本学図書館にて公開された。世界有数の貴重資料が画家の創作に及ぼした影響を示す展示として、多くの学生や教職員、外部観覧者に示唆を与えた企画となった。前回展示からより範囲を絞るため、風刺画が映す当時の人間を紐解くことを課題としたが、採択時に前回企画との明確な違いが読み取れないとの指摘を受けた。そこで、成果展示のタイトルを「Le Rire と音楽」とし、テーマをさらに絞ることにした。風刺画に描かれた音楽の描写に焦点を当て、音楽学部／美術学部どちらの利活用にも資する企画として進めていった。資料の洗い直しにあたっては女子美術大学の三谷理華教授とともに、キャバレーやミュージックホールをはじめとする音楽実践の場が大衆音楽をいかに支えたか、楽器や楽譜や新しい音の記録再生技術がどう紹介されているか、当時の歌手や演奏家、役者やディレクターといった人々の描写といった点を主軸に選定を行った。成果展示は前回よりも共有性の高い場所での実施が期待されたため、アーツ&サイエンスラボ1F ギャラリースペースで5日間にわたって開催した。中央のガラスケースおよび机上には「場」「人」「楽器/楽譜/音声機器」の3つのカテゴリーに分けて原本 40 点余りを展示し、周りには旧蔵者渡辺恂三による音楽をモチーフを描いた作品やベル・エポック・蓄音機などの関連書籍を並べた。初日には図書館所蔵の蓄音機で SP の鑑賞会も行った。	
実績報告 ※プロジェクトを通じてどのような成果を得ることができたのかについて具体的に記載。 (500～600 字) ※別途、プロジェクトの実施状況や成果が分かるものを画像ファイルもご提出ください。 (必須)	成果展示では、19 世紀末～20 世紀にかけての時代における音楽の表象を担う媒体としての Le Rire を浮き彫りにすることができた。ダンスホールやキャバレーだけではなく劇場やサーカス小屋の描写も多く、ベル・エポックのフランスが文化的に活気に満ちた場であったことがうかがえた。帝国主義列強の時代らしく軍楽隊やパレードの描写も多く、第一次大戦の直前には華やかなモチーフはあまりみられなくなった。人物の描写においては、当時の都市生活ではさまざまな階級の人々が活躍し、多彩な芸術活動の一端を担っていたことがわかった。近代的生き方の概念が観客の様相にも変化をもたらしていた様子が、活写された風刺画からみてとれた。また、大衆雑誌の中にシャンソンやジャズの楽譜が登場することはデザインとしても郷土資料としても興味深いものであった。楽器の描写もルネサンス期より続く古楽器から産業化によって新しく発明された音声機器まで、フランスにおける楽器というメディアの受容を考えるうえでも見逃せない。特に、蓄音機の広告が Le Rire 誌上にたびたび掲載されており、蓄音機の普及速度の速さがうかがえた。そこで当時のシャンソンやクラシック、そして蓄音機の技術に着目した関連企画として、展示初日に附属図書館所蔵の蓄音機と所蔵 SP によるミニ鑑賞会を行った。同時代に生まれた演奏家や歌手にできるだけ絞って附属図書館資料担当の西山朋代さんと選定を行い、 ① ドビュッシー「アラベスク第 2 番」Columbia(日本)J5188 1930 年録音 ピアノ:マルグリット・ロン(1874-1966) ② サティ「三つのメロディ」Columbia(日本)SW276 1930 年頃録音 歌:ジャーン・バトリ(1877-1970) ピアノ:ダリウス・ミヨー ③ フォーレ「シャイロック」より「夜想曲」Gramophone(仏)DA4957 1943 年録音 チェロ:ピエール・フルニエ(1906-1986) ピアノ:タツノ・ヤノブーロ ④ ブラームス作曲 JacquesLarue 作詞「Loindetoncoeur」Columbia(仏)LF233 1946 年録音 歌:ティノ・ロッシ(1907-1983)	

	⑤ ルマルク作詞・作曲「兵隊が戦争にゆく時」 Angel(日本)OH5011 1952 年録音 歌:イブ・モンタン(1921-1991) ⑥ Claret 作曲 Bayle 作詞「Sipetite」 Columbia(日本)J1901 1932 年録音 歌:リュシエンヌ・ボワイエ(1901-1983) ⑦ Larrieux 作曲 Hermite 作詞「Nuitd'alger」 Columbia(仏)DF2026 1936 年録音 歌:ジョセフィン・ベイカー(1906-1975) の7曲を鑑賞した。このように附属図書館の蓄音機と所蔵 SP、そして Le Rire という種類の異なる多様な貴重資料を結びつけたプロジェクトは、資源活用の在り方として新たな活路を見出すことができた。今後の展望として、風刺画の表象だけでなく演奏家の詳細や演目の詳細など記事の内容も調査しつつ先述のような音声資料との結びつきを探る研究は Le Rire 誌の活用としては有意義であると予想される。 展示期間中は学内外の来場者に恵まれ、前回よりもその層には広がりがあったと認識している。このような貴重な資料がこんなに良い状態で藝大にあるとは知らなかった、という方が多く、公開の機会があることは有意義だという感想もいただいた。また、今回のような音楽研究と組み合わせるなど、多分野への接続可能性が期待できる資料だと励ましもいただいた。シャンソンの研究など、もう少し専門性を高くもって深掘りしたいところではあったが、この資料の展望を示す機会としては前回よりも踏み込んだものになったと確信している。図書館所蔵の蓄音機や SP との関連性をより深めた調査を行うなど、今後の構想は広がった。
--	---

※本様式に加え、補足資料として PDF ファイルや音声データ、映像データ等の提出も可。(必須ではありません)